【論　文】

リヒテナウ伯爵夫人

――E・T・A・ホフマン『精霊奇譚』覚え書き――

鈴　木　　潔

1　はじめに

大学を卒業したホフマンが司法官試補として最初に赴任した町はプロイセンの植民都市グローガウで、この時代（一七九六年～九八年）の逸話では、将来の創作に重大な影響を与えた画家モリナリ Aloys Molinary との出会いがよく知られている。この風変りな画家をそのまま素材にして主人公を造形した物語に『G市のイェズイット教会』Die Jesuiterkirche in G.（1816）があるし、そのほかホフマンの描く様々な芸術家像にモリナリの風貌が痕跡を残している。ところでホフマンは、グローガウでもうひとり歴史に名を残す人物と遭遇している。この出会いは一般にはあまり注目されないのだが、こちらの人物も後のホフマンの作品にひとつの材料を提供している。それは『精霊奇譚』Der Elementargeist（1821）でL伯爵夫人 Gräfin von L. として描かれる女性である。

『精霊奇譚』のL伯爵夫人はプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世の愛妾、リヒテナウ伯爵夫人 Wilhelmine Gräfin von Lichtenau (1752-1820) がモデルだろうという推測にはほとんど異論がないと思われる。だがこれまでこのモデル問題を作品解釈の上で積極的に取り上げる研究は見あたらない。だいたい『精霊奇譚』という作品自体がどちらかいうと出来のよくない部類に分類されていて、これを主要な対象とした研究が少ないのである。いわく、すでに売れっ子作家となっていたホフマンが殺到する注文を受けて書きなぐったもののひとつだ、いわく、これまでに使った題材やらモチーフを再利用している。いわく、かつてルイスの『マンク』Matthew Gregory Lewis: The Monk (1799) を下敷にした『悪魔の霊液』Die Elixiere des Teufels (1816) では原作以上のものを作ることに成功したが、カゾット『悪魔の恋』Jacques Cazotte: Le Diable Amoureux (1772) を用いているこの物語では、ホフマン独自の世界を作るところまでには達していない、などなど。[1] こういう評価が一般的で、ホーフマンスタールがあるアンソロジーに、ホフマンの数多い創作中からこれを選んだことが、『精霊奇譚』に与えられた例外的な栄誉と思われるくらいである。

ここではL夫人のモデル問題を検討することで『精霊奇譚』の読解の可能性を広げられるかどうか、つまりこの奇譚を読むときの楽しみがひとつ、つけ加えられるかどうか、それを探ってみたい。

2　作品の謎とモデル問題

『精霊奇譚』を子細に読み返してみるといくつかの謎にいきあたる。登場人物の性格づけでいえば、魔法の技に通じているオマリィ少佐はほんとうに悪魔の手先なのか、いくぶん曖昧なところがある。物語の構成上から悪の世界に

属するものでなければならないはずだが、そうと決めつけられない、どことなく愛すべきところがむしろ強く印象づけられる。事実、物語世界の人間にとっても同じらしくて、主人公のプロイセン陸軍士官ヴィクトールも、オマリィ少佐が「極悪非道の者」と呼ばれたとき、ひどく驚いている。悪魔の手先だからといって必ずしも憎々しげに描く必要はないが、オマリィがこのように魅力的に形象されたのはなぜか。両者が親しくなるきっかけの場面、すなわちヴィクトールが散歩中にこの変わり者の少佐と遭遇する場面も謎めいていて、繁の中でオマリィは何をしていたのか明確でない。自殺をはかろうとして倒れていたのか。自殺と断言しているのは作中のL伯爵夫人のみだが、オマリィ自身も「命の恩人」とヴィクトールを呼んでいる。そうとすれば、その理由は何か。自殺ではなくひょっとして密かに魔術をおこなっていたのか。(2)

それから〈アウローラ〉の謎である。オマリィに招び出された精霊（サラマンダー）が最初は人形として、あとでは「ティチアーノの絵のような肌をした」女性の姿でヴィクトールを誘惑したのは、あくまでも悪魔の手先としての働きをしたのか。それとも真剣にヴィクトールを愛したのか。例えば次のシーンなどを読めば そのようにも思われる。精霊アウローラが自分のために「彼岸の至福」を諦められるかと迫ったのに対して、ヴィクトールが「きみ以外に至福などあるものか」と答えた、その次の日のことである。「森の、あの禍禍しい廃墟からほど遠くないところで、ヴェールをかぶった女の姿が目に入った。木の下に横になって、ひとりごとを言っているようだった、注意ぶかく近寄ってみると、こんな言葉が聞えた。『あの人は私のものよ、私のものよ――ああ、なんたる喜び――あの人は最後の試みにも合格したわ、――人間にこんな愛の能力があるとすれば、愛なしでは、一体、私たちの惨めな存在は何でしょう』――」。こうして〈アウローラ〉の謎(3)はついには彼女がなぜ男爵夫人となったかという、おそらくは全体のか

なめとなる問題に行き着く。最後に彼女は「精神の苦痛に耐えさせられながら、その苦痛を健康な身体が嘲笑するという状態で私は重い罪を償っているのです」と告白する、その「重い罪」とはヴィクトールを籠絡して悪魔と盟約を結ばせることに失敗した罪なのだろうか。この問題はあとで作品の構造について考えるおりにもう一度取り上げることにする。

つぎは作品の〈ホフマン的幻想性〉の問題と最も密接に関わる点だが、ヴィクトールは最終的には〈アウローラ〉との経緯を、つまり青年時代のオマリィとの出会いからE男爵夫人との関係に至るまですべてを「長い夢のようなもの」と認めた、とアルベルトの言うのはほんとうなのか。とすれば結末のヴィクトールの言葉はどのように受け取ればいいのか。「魔法にかけられて、いかがわしい方法で不気味な力に仕えねば、という気になったにせよ、あるいはほんとうに不気味な力がぼくを誘惑しようとしていたにせよ、どちらでもいい。来世の至福は失わなかったが、愛の楽園は失ってしまった。あのときは、地上の快楽のきわみを感じたあのときは、二度とやってこない。甘美きわまる恍惚の夢の極致、愛そのものがこの腕にあった。心のいちばん奥底にとって、この地上では二度と見ることがないような真に崇高な存在だった女性を、恐ろしい秘密が奪ってしまってからは、もう愛も悦びもない」。かくて「大佐は終生、結婚しなかった」との一行をもって物語は終るが、ここで「夢」というなら、根拠のない妄想という意味の次元から、ロマン派独特の観念における「夢」への推移を見逃せないであろう。しかもそこにはホフマン独特の幻想を発現させる仕掛がひそんでいることは、あとでちょっと触れる。

以上挙げたものは、『精霊奇譚』の解釈、評価を左右する焦点だろうし、ひいてはホフマンの文学世界の奥深い秘密に関わるような問題である。他の全作品との関連の上で考えなければならない問題については本稿の論旨に関係す

る点のみ触れるにとどめたい。しかしこの奇譚には別種の謎、いわば少しレヴェルの異なる問題と言えるだろうが、物語の進行上いかなる必要があってこういう人物を登場させたのだろう、作品中で何か役割を果たしているのだろうか、という疑問を抱かせるところがある。そういう単純な創作技法上の、少し気楽な謎の筆頭は、L侯爵夫人の存在ではないだろうか。

彼女はオマリィ少佐の敵対者として主人公ヴィクトールを籠絡しようとするが、いったい物語の上でどのように位置づけられるだろうか。L夫人は精霊世界に対する現世からの引力としてヴィクトールに働くものの、『精霊奇譚』のストーリーの上で本筋ではなく、なくても済むエピソードとも見える。精霊世界の愛と地上の愛というペアー、主人公の魂がその両者に引き裂かれるという構図はホフマンお得意のモチーフで『黄金宝壷』のゼルペンティーナとヴェローニカ以来おなじみである。ただ『精霊奇譚』ではL伯爵夫人の登場がいささか唐突で、消え方もあっけない。現世を代表する女性にしてはオマリィのことを「カバラの方士」と呼んだり、「黒魔術で」ヴィクトールを破滅させようとしていると言ったり、なにか魔術方面に通じ過ぎている印象もあって、位置づけがあいまいに思える。彼女がオマリィを敵視するのは、魔術めいたことを嫌う通常の人間としてなのか、それとも彼女もまた精霊世界につながりがあって、そこでオマリィと敵同士なのだろうか。L夫人については何か釈然としないのである。

3　カゾット『悪魔の恋』との比較

まず『精霊奇譚』の作品構成の骨格を把握するため、作中でも明白にされている、カゾットの作品との関係を見る必要がある。オマリィ少佐と知り合ってしばらくしたころ、ヴィクトールはたまたま手にしたドイツ語訳の『悪魔の

恋』を読んで「根底から影響を受けた」と言い、「カゾットのメールヘンが自分の運命を映しだす魔法の鏡と思われた」と述べられている。

『悪魔の恋』の、スペイン出身でナポリ王の士官アルヴァーレと精霊ビョンデッタの物語がここではプロイセンの士官ヴィクトールと精霊アウローラの物語になる。主人公ヴィクトール大佐の若い時代、士官として奉職し始めのころの話が物語の本筋を構成している。舞台はP市およびB市、すなわちポツダム、ベルリンとおぼしき町である。『悪魔の恋』でフランドル出身のソベラーノが降霊術師として物語の発端を担うが、それに対応するのがオマリィというアイルランド人の少佐である。彼は精霊を使ってヴィクトールの魂を奪おうとする。錬金術の実験めいた魔法で人形〈テラフィム〉を生み出し、その精霊が（ビョンデッタは空気の精シルフィードだがこちらは火の精サラマンダー）人間の姿をとりはじめ、〈アウローラ〉としてヴィクトールの官能を刺激し、心を捉えていくという経過をたどる。ついには欲望の充足と引き換えに魂を売り渡す寸前までいくが、しかし結局ヴィクトールの従僕、信心の篤い忠実なパウル・タルケバルトが、占いをよくするリーゼ婆さんの後ろ盾を得て悪魔の企みを阻止する。

その前の段階で、アウローラならびにオマリィに対抗する人物としてL伯爵夫人が登場する。このあたりを少し詳しく引用する。

「フォン・L伯爵夫人、当時、B市の第一級のサークルで人目を惹いていた、比類なく優美で魅力的で同時に男たらしの女性に会った。彼女の一瞥だけで、当時ぼくのおかれていた気分から、いとも軽々と彼女の網に絡めとられてもしかたなかった。そうなんだ、ついには心をあらいざらい打ちあけ、秘密を明し、胸に秘めたあの像を見せる、というところまで籠絡されるにいたったのだ」ということになる。それを聞いて彼女はオマリィの悪行を言い立て、彼

と手を切るように言い、まずテラフィムを彼女の手に委ねること、そうすれば彼女の寵愛が与えられると約束する。

「さて、燃える愛の渇きを癒すことなく長い時間恋人をやつれさせるというのが、伯爵夫人の伯爵夫人たる所以であろう。事実、ぼくはやつれはてていた。が、ついに望みがかなえられそうな時がきた。真夜中に、顔見知りの女中が宮殿の裏門の一つで、ぼくを待っていて、遠くはずれた廊下を通ってある部屋に案内された。部屋は愛の神が手ずから飾り付けたように見えた。ここで夫人を待つように、という。部屋に漂う洗練された香料の甘美な香のため、愛と期待に震え、ぼくは部屋の中央で立っていた。とそのとき、稲光のように、心の奥底をある視線が貫き通した――」

オマリィの魔術、テラフィム人形アウローラの力が、現世のL夫人の引力を断ち切るのである。

「――形なく、なにも見えなかったが、しかし胸の奥深くで視線を感じ、オマリィが傷つけたあの箇所に突然の痛みを感じた。同時に、暖炉の縁に人形があるのに気づき、さっと手に取って、部屋をとびだし、驚く女中を脅して外へ案内させ、家へ駆けもどって、パウルをたたき起こし荷造させた。夜明けにはもうP市への帰途についていた」という次第である。

このあとL伯爵夫人は再度登場することはない。とすれば、かくの如く失敗に終ったものの、もし夫人がヴィクトールの籠絡に成功したとき、どうするつもりだったのだろうか、という妙な疑問が浮かんでくる。青年を暗黒の魔手から救うのか、または彼女も別の悪の手先なのか。手本の『悪魔の恋』にはこのL夫人に対応する人物は登場するだろうか。ビョンデッタの恋敵としてはオランピアという遊女が出て来るが、それは人間への愛ゆえに支配を逃れようとする精霊を咎める悪魔の手の者、ソベラーノ／ビョンデッタの陣営に属する者で、オマリィ／アウローラ陣営と敵対するL伯爵夫人とは立場が反対である。

カゾットの『悪魔の恋』と比べると、若い軍人が美しい女性の姿をとった精霊世界の存在に誘惑され、悪魔に魂を売り渡す寸前まで行く、という話の骨組みではおおむね一致する。ただ『悪魔の恋』は、美しい女性の姿となった精霊が「薔薇の甘い香り」（邦訳一五〇ページ）のごとき蠱惑の力でアルヴァーレの官能を刺激してゆく様子を描くことに、描写の主力がおかれているように見える。これでもか、これでもかといった調子で、女性の美しさ、かよわさ、涙、媚態を駆使するビョンデッタの手練手管が描かれ、息苦しいほどだ。最後にアルヴァーレを悪魔の罠から救うのは、信心深い母親である。

ホフマンの『精霊奇譚』では、精霊の誘惑の過程を微に入り、細をうがちという風には描写されない。なにより、深刻な事態のまっただ中に、いつも滑稽な出来事が侵入してきて、そのため全体としてユーモラスなトーンが勝っていることが、カゾットの場合とは印象を異にする最大の要素だろう。最後にヴィクトールを悪魔の罠から救うパウル・タルケバルトは、サンチョ・パンサ的従者である。

4　物語の時間構造とアウローラ

カゾットの物語と比較して構成上いちばん異なっているのは、『精霊奇譚』が枠物語の形式をとっていることであろう。枠物語形式はホフマンに多いのだが、これが物語構造上『悪魔の恋』と決定的な違いを作り出している。プロイセンの陸軍大佐アルベルトがE男爵の館で友人ヴィクトールと再会するのが外枠となる物語で、ヴィクトールの青年時代の打ち明け話が枠の内側の物語である。物語の現在は、冒頭に「ときは一八一五年の十一月二十日のこと、プロイセンの陸軍中佐アルベルト・フォン・Bはリュッティヒからアーヘンへむかう道にあった」と、正確な日付が与

えられている。すなわち『精霊奇譚』の外枠の時間として、アルベルトが友人ヴィクトールに再会するのは十一月二十日の午後、そして物語はその夜と翌朝のできごととなる。これをナポレオン戦争の歴史年表と照らし合わせてみると、エルバ島を脱出したナポレオンがカンヌに上陸したのが、一八一五年三月一日、十九日に悠々とパリに入城していわゆる「百日天下」が始まる。ウェリントンの率いるイギリス軍、ブリュッヒャーの率いるプロイセン軍を中心とする同盟軍との間で開戦、ワーテルローの戦いを経て、七月七日、同盟軍のパリ占領、百日天下は終る。従ってふたりが別れていた間のことは、解放戦争の六月から、七月初めまでの時期だろう。一八一三年の戦闘で健康を損ねていたヴィクトールが、エルバ島を脱出したナポレオンとの新たな戦いのため、ニーダーラインの軍団に赴く途中、E男爵の屋敷前で落馬し、男爵夫人の手厚い看護を受けてそこに逗留することになったのはこの間のことで、恐らく三月末か四月ということになろう。

それぞれの近況の報告が一段落して、介抱を受けたE男爵夫人のことをヴィクトールが口をきわめて誉め讃えるのを、アルベルトに冷やかされるが、「ここにはちょっと事情の違う、不思議なことがあるんだ」として、彼の少年時代、青年時代からの長い物語を始める。この部分が『精霊奇譚』の内側の物語となる。ヴィクトールの話が終り、一夜あけたとき、すなわち話が外枠に戻って、物語の結末近く、この中年の、肥満気味の、日に焼けた、いかにも田舎貴族の主婦然とした男爵夫人が、他ならぬ妖精の〈アウローラ〉だと判明する。

このようにアウローラが枠物語の外と内を繋ぐ、すなわち枠物語の現在とヴィクトールの物語を繋ぐ結節点となっている。一言で「枠物語」といっても『千一夜物語』『デカメロン』『カンタベリー物語』などのように枠の中に複数の物語がある場合と、単一の物語で入れ子型の枠物語となる場合とあるが、いずれにせよフレームの物語は単に内側

の物語のきっかけを作るだけというのが枠物語一般の形式であろう。それと違って、ここでは外と内のそれぞれの物語が最後には、突如、絡み合って繋がる。内部の物語が外部の現実的世界に浸透してくることで、現実がゆらぐ。これが『精霊奇譚』の構造の要であり、現実世界の二重化の支点、現実世界に超現実を持ち込む導入口、物語のすべてが円環を結ぶ点、そしてこれが浮遊感を伴った〈ホフマン的幻想〉を読者の内に生じさせる発火点である。(4)

ここで改めて物語を最初から振り返ってみると、読者の虚をつく決着の仕掛には、周到な用意がされていたことに気づかれる。そもそもの発端から不思議な夢に駆り立てられて（「それは夢ではない」とのヴィクトールの言葉はむしろ夢の予知能力を強調する）アルベルトが出立するのだし、タルケバルトとの遭遇の仕方など、男爵夫人の屋敷近辺に超自然の力が働いていることに結びつく。どんな激しい戦闘中でも恐れを知らなかった馬が、屋敷の前で突如棒立ちになって、ヴィクトールが落馬したという事情。「ここには何か不思議なことがある」とのヴィクトールの言葉。アルベルトの話に居眠りをしたことを謝罪する夫人の物腰が優美かつ高貴で「すっかり別人に変わった」感じがすること。これらすべては、男爵夫人こそ実は〈アウローラ〉だという意外な結末の伏線となっている。そして最後で、「夢」という言葉を、事実ではない妄想という通常の意味と、ロマン派的な超現実との両域に重ねて使っているのも、現実世界を二重化する仕掛の一端を担っているといえるだろう。

精霊世界の愛と地上の愛というペアー、主人公の魂がその両者に引き裂かれるという、『黄金宝壺』のゼルペンティーナとヴェローニカ以来おなじみのモチーフで言うと、『精霊奇譚』ではL伯爵夫人がヴェローニカ役を果たすのではなく、むしろアウローラの一身に両者の対立が表現されている。すなわち精霊としての〈アウローラ〉と、男爵夫人アウローラとの対立。ここにこの奇譚の最もスリリングな仕掛があるといえるが、本稿のテーマからは外れる。

さしあたりは「精神の苦痛に耐えさせられながら、その苦痛を健康な身体が嘲笑するという状態で私は重い罪を償っているのです」という夫人の述懐をもって、妖美な〈アウローラ〉がころころ太った中年の男爵夫人となった理由とする作者の説明を、ここでは受け入れておこう。ふたつの時間と現実をショートさせる作者の手口を、巧みに隠ぺいする狡猾な弁明だが。

5　リヒテナウ伯爵夫人とフリードリヒ・ヴィルヘルム二世

『精霊奇譚』のL伯爵夫人の謎は、それがプロイセン王の愛人をモデルとしていることから説明がつくのではないか、という推測を以下に述べるにあたって、当時のプロイセン宮廷の様子を説明しておかねばならない。リヒテナウ伯爵夫人はプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（在位 1786-97）が、その皇太子時代から愛妾とした女性である。この王は何かというと偉大な先王と対照的に描かれる。痩躯精悍な大王に対して、こちらは鈍重な肥満体、謹厳に対して華美軽薄好色、毅然に対して優柔不断、啓蒙君主に対して蒙昧君主というぐあいで、大王の時代（在位 1740-86）と、あとのフリードリヒ・ヴィルヘルム三世（在位 1797-1840）の間のこの王の時代は、フランス革命というヨーロッパ世界を揺るがす事変に的確な対処が出来ず、外交的成果といえばオーストリアとロシアの尻馬に乗ってポーランドを分割し領民・領土を増やしたくらい、内政では啓蒙主義を敵にした反動政策のみが言いたてられ、わずか十一年という短さもあって後世の歴史家の目からみれば華々しい近代プロイセン史のエアーポケットと感じられる時代だろう。お気に入りばかりを要職にすえて、その言うがままになった王、特に大臣ヴェルナー、将軍ビショッフヴェルダー[5]に誑かされてそのいかがわしい秘密結社に入会、宮殿で降霊術を行なって、亡霊の言葉を信じた。また

無類の女好きで二度結婚し、側女、愛妾に生ませた子どもは数知れない。なかでも宮廷楽士の娘、美貌のヴィルヘルミーネを溺愛したことは有名で、王子の時に見初めて、彼が王に即位すると、リヒテナウ伯爵夫人に仕立てあげ、愛妾の求めのままに屋敷、別荘、地所、年金を与え国費を蕩尽した、とされている。

『精霊奇譚』のプロイセン士官ヴィクトールが物語る出来事の時代、すなわち彼の青年時代はだいたいこのフリードリヒ・ヴィルヘルム二世時代から三世時代の初めにあたると思われる。ヴィクトールがオマリィ少佐の人物の謎めいたところを描写する箇所で「後々まで語り草となるような神秘な出来事」に関連したとの噂だ、という一節がある。これはベルリンの宮廷で黄金薔薇十字結社が力を持ち、心霊術で王に影響を与えたことを指している。そのすぐあとで『聖職追放者』という、事件を扱った小説名を出しているから、その点は疑う余地がない。(6)

主人公ヴィクトールの青年時代は、物語の日付から逆算して、ホフマン自身の青年時代と重なる。そもそも主人公ヴィクトールの青年時代の描写は、その性格、気分、読書体験など、ほぼホフマン自身の体験に基づいたものだから、このあたりの描写も作者ホフマン自身が耳にした噂、目にした書物を描いていると見なしてよいだろう。

リヒテナウ伯爵夫人の生涯を簡単に紹介しておく。ヴィルヘルミーネの父はフリードリヒ大王の宮廷楽団トランペット奏者エーリアス・エンケ Elias Enke で、小さな酒場も持っていた。彼女は、後にシュレージエンの裕福な伯爵と結婚した姉クリスチアーネの側にいる方が多かった。幼いころから美貌で人目を引き、皇太子がこの姉のもとで美しいヴィルヘルミーネを見初めたのは彼女がまだ十二歳の時だった。ポツダムに住まわせたり、フランス語に磨きをかけ貴族の行儀作法を身につけるため、姉とともにパリへ「遊学」させられたりするが、皇太子自ら歴史、地理、文学などの教育を施したことは有名。後に彼女は回想録で、君主の愛妾の中で「肉体の魅力、精神は自分よりはるか

に優れたものが多いだろうが、精神が愛人自身によって作られた点では比べるものがない」と言っている。[7] 一七七〇年一月二七日、皇太子はヴィルヘルミーネと指輪を交換した。これは教会の認めた結婚ではないが、二人は血の署名による愛の誓いをしたと言われる。この関係を苦々しく見ているフリードリヒ大王の目を避けて一時ハンブルクへ逃れたりするが、やがてシャルロッテンブルクに田舎家を、それからベルリンのモーレン通りに邸宅と三万ターラーの年金を与えられる。ふたりの間には五人の子供がうまれたが（認知されなかった子どももいる）、死産であったり、幼くして亡くなったものが多い。第三子のアレクサンダー Alexander Graf von der Mark については毒殺説もある。[8] 周囲の反感のため、宮廷庭師ヨーハン・フリードリヒ・リーツ Johann Friedrich Rietz と名目だけの結婚をさせられる。

フリードリヒ・ヴィルヘルムの即位後も、また王に他の愛人ができてもヴィルヘルミーネとの間は疎遠になることなく、逆にさらに親密になった。王の取り巻きとの関係については、宮廷を牛耳る薔薇十字結社の一派に初めは激しく反発していたが、後にはむしろ彼女も王の神秘趣味を利用したとされている。ベルリンの中心、ウンター・デン・リンデンに屋敷、郊外に地所、それに五十万ターラーの資本を与えられる。一七九五年病気療養のためイタリア旅行。そのとき九四年に遡って叙爵され、リヒテナウ伯爵夫人となった。十万ターラーのオランダ債券も与えられる。瀕死の王には彼女一人がつきっきりで看病した。王の崩御の日（1797.11.16）に逮捕される。翌年一月、厳しい査問が行なわれたものの、二月二十日の裁決で彼女の有罪は立証されなかった。新王は彼女にモーレン通りの邸宅と年金四千ターラーを承認して、グローガウに抑留と決める（1798.3.13から）。二年後の秋、自由の身となって、宝石、家具、美術品を返還され、その他の請求権を放棄するかわりに四千ターラーの年金を終身保証された。一八〇二年には

地所の一部を返還され、晩年はベルリンで過ごした。[9]

6　黄金薔薇十字結社

黄金薔薇十字結社は、一七五七年に成立したとされ、一七八〇、九〇年代のごく短期間に非常な政治的影響力を発揮し、そのあと急速に歴史の舞台から去った秘密結社である。[10] 活動が盛んとなるのは、一七六四年にフリーメーソンとの繋がりができ、その後、結社中結社の結成、すなわち既成結社への潜入、乗っ取り方針が決まって以来のことである。新入結社員は数字、記号のシンボル、四大についての教えを学ぶ。その教義というか、思想体系の核となっているのはネオプラトニズム、パラケルスス、ベーメなどの系統の汎神論的な流出理論というから、自然の認識が神の認識につながる、というロマン派の自然観でおなじみのあれである。この理念は教会キリスト教に満たされない部分を吸い上げたと言うべきか。一七七七年の改革で「キリストの国建設」を目指すとして、単なる宗教的なものから政治的色彩を鮮明にする。リクルートする対象は、自然研究家、医者、高級将校、神学者、いずれも上流ブルジョアと貴族であった。組織の方法は敵対する結社フリーメーソンの、特にその高位位階システムにならって作られている。会員には厳格な守秘義務が課せられていて、知識を深めることとヒエラルキーの強化が一致するという巧妙な組織作りであった。会は、南ドイツ、ウィーン、ザクセン、シュレージエン、ベルリン、さらにポーランド、ロシアと広まったが、なかんずくフリードリヒ・ヴィルヘルム二世治下のプロイセンで活動のピークと、そして没落を迎える。王は、まだ皇太子時代、一七八一年八月八日にこの黄金薔薇十字兄弟社に入社した（結社員としての名は Ormesus）。

ここで、リヒテナウ伯爵夫人と並んで『精霊奇譚』の背景を形作る、黄金薔薇十字会の大立者二名の紹介をして

おく。

ヴェルナー Wöllner, Johann Christoph v. は、一七三二年、牧師の家に生まれ、ハレ大学神学部で学ぶ。フォン・イッツェンプリッツ将軍の恩顧を受け、その領地の牧師になる。将軍の死後、未亡人から地所を賃借し農地経営に精出す。農業及び農民の状況についての著作を数冊著わす。啓蒙主義の牙城と言われたニコライの „Allgemeine Deutsche Bibliothek" にも農業書新刊の書評を載せた。六六年、将軍の一人娘と結婚、しかし平民との結婚に反対する将軍の親族が国王に訴える。爵位の請願にたいしてフリードリヒ大王は「ヴェルナーは嘘付きの陰謀をたくらむ坊主だ」と拒否したことは有名。大臣フォン・ハーゲンの命で東フリースランド、オランダに泥炭炭鉱などを視察。一七七〇年、ハインリヒ王子所領の財務担当となる。六六年ベルリンのフリーメーソン・ロッジ〈Zur Eintracht〉のメンバーとなり、七一年〈Zu den drei Weltkugeln〉のグランドマスターとなった。この活動を通じてドイツの諸邦の君主たちと近づきになる。そのあと薔薇十字会に加入。彼の活動で会は拡大し、七七年の彼がイニシアチヴをとった改革で政治色を強める。王の即位とともに重用される。八六年八月枢密財政顧問。十月叙爵、総理大臣格にのし上がる。タバコ、コーヒー専売の廃止、プロイセン最初の直接税導入などの政策を行なう。八八年、宗教部門の長に任命されるや、悪名高い宗教勅令、検閲勅令を公布させる。諸学校、大学神学部の宗教教育のために検定教科書を導入した。これらの施策のため „der Totengräber des alten Preußens" と呼ばれる。王の死に際して新王に忠誠を誓うが九八年三月免職となり、恩給も与えられず。一八〇〇年九月死去。

ヴェルナーよりも王の愛顧を得たのがビショッフヴェルダー Johann Rudolph von Bischoffwerder で一七四一年生まれ、父はザクセン選帝侯の騎兵隊長、のち元帥の副官、ハレ大学で学ぶ。七年戦争のとき、プロイセン騎兵の

コルネット（最年少士官・旗手）。バイエルン継承戦争のとき再びプロイセン軍ハインリヒ王子の部隊に。このとき皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムの面識を得、隠秘学の知識で皇太子を完全にとりこにする。ヴィルヘルミーネ（リヒテナウ夫人）だけが彼に立ち向かえたと言われる。一七七九年に黄金薔薇十字会に入会し、その活動でヴェルナーと知り合う。有名な詐欺師シュレプファーの自殺の場に居合わせた。サン・ジェルマンとも交渉があったらしい。シャルロッテンブルクでの招霊会を主宰する。フリードリヒ・ヴィルヘルムが即位したときビショッフヴェルダーは少佐、一七八六年中佐・侍従武官、八七年大佐、八九年将軍副官。九一年皇帝レオポルトのもとに派遣される。トルコとの和平交渉などのあとも国王の密命を帯びた外交使節として活躍。九六年中将。王の死により免職。ポツダム近くのマルクヴァルトに隠遁。一八〇三年、死去。

ビショッフヴェルダーは王に絶対的な影響力を持っていたとされるが、国王から受ける信頼と恩寵という点で彼に唯一人対抗できるのは、リヒテナウ夫人で、将軍がシャルロッテンブルク宮殿で国王臨席のもと、あやしげな降霊術を用いたのもリヒテナウに対抗するため、とも言われている。[11] 彼女は薔薇十字の招霊術などてんから信じていなかった。[12] とすると、この二人は『精霊奇譚』のオマリィ少佐とL夫人像とに重なってくる。『精霊奇譚』でL夫人は「かつてなかったほどの真剣さで話を聞き、話し終えると、目に涙を浮かべて、悪名高いオマリィの悪魔の仕事とは手を切るように」と懇願する。オマリィのことを「カバラの方士」と呼び、その行いについて「実に深く、詳しく説くので、少なからず驚かされた。だがなにより驚いたのは、少佐のことを極悪非道の裏切りもの、と批難したときだ。理由は、あなたが彼の命を救ったのに対して、彼が黒魔術であなたを破滅させようとしているから」と言う。「少佐

があなたの心を、と伯爵夫人は話をむすんだ、あなたの心を病気にしたのなら、治してあげます、第一歩はこの人形を私の手に委ねることです」と言って、テラフィムを取り上げようとするのも、とにかくオマリィの策略を阻止しようとする意図からなのだろう。彼女も手練手管を弄してヴィクトールを籠絡するが、じらすことで余計に引きつけるという、そのやりかたはいかにも後宮から政治を牛耳ろうとする淫婦の如くである。しかしあっさりヴィクトールに逃げられてそれ以後の成りゆきに何の影響も及ぼさない。

十八世紀末から十九世紀初めの二十年ばかり、ベルリン市民、プロイセン国民のあいだで常にゴシップの種であり続けたリヒテナウ伯爵夫人のことが、ホフマンには余人に増して記憶に刻みつけられる事情があった。というのは、王の死でリヒテナウが宮廷を逐われたのは、ちょうどホフマンが大学を終えて司法官の経歴を歩み始めたときにあたり、しかも夫人の流謫地が他ならぬホフマンの最初の任地グローガウであった。ホフマンは国家を揺るがすスキャンダルのヒロインを受け入れた田舎町の騒ぎをつぶさに観察したし、もちろん彼女と親しく接する機会もあった。彼女の人柄と周囲の大騒ぎの様子を彼は友人ヒッペル宛の手紙に次のように活写している。

「珍しい人と知り合いになった！――リヒテナウ伯爵夫人がいま当地の要塞にいて、ぼくらのところへよく来るんだ。――いやはや、何という威厳と卑賤の混淆か！――何という教養――何という知性――何という無作法――この女性はまったく手品の箱だ、思っているのとは全然違うものが出てくる――火の消えてくすぶるこの松明の芯は、グローガウでちょっとまた火が点くんじゃないか。司令官も軍隊も彼女には丁重に接するよう命令されている――連中はだから丁重なんだ――上流の者たちは大体そうだよ。下層民は命令などお構い無しだ――伯爵夫人を扱った愚かしい低級なパンフレットを読んでは、法螺話の安酒でメートルをあげているさ――仕立屋は針を置いてリヒテナウ伯爵

夫人の伝記を読む、見習い小僧は撚り糸を忘れて彼女の肖像を持って来る、ニュージーランド風に描かれた絵だぜ！――床屋の道具袋にもみな伯爵夫人リヒテナウの告白が入っているし、十一時には整髪前の頭がいらいらしながら窓から覗いて、今か今かと床屋を待っているが、床屋の方は伯爵夫人リヒテナウのくだらない最新情報を読みながら、ようやく角をのろくさ曲がって来る。いつもなら三時間早く飛ぶようにやって来るのにさ――無頼の連中はご承知のように正義を行なう――民ノ声ハ神ノ声――それゆえ若者は通りの騎馬哨兵となっている。小競り合いの前哨と、集まってきた大人数の軽装備の前衛は、伯爵夫人が馬車を乗降するとき間断なく雪つぶてを発砲し――神様が雪を与えてくださらなくなったときは、警察が中に割って入らないと、ある形に鋳造されていつも路上にある、あの灼熱の弾丸を使うことになるんじゃないかとぼくは心配だ。これは冗談なんかではないよ」[13]

さて、この手紙のリヒテナウ夫人の人物像を、『精霊奇譚』のL伯爵夫人の描写と比較して貰いたい。「フォン・L伯爵夫人、当時、B市の第一級のサークルで人目を惹いていた、比類なく優美で魅力的で同時に男たらしの女性に会った。彼女の一瞥だけで、当時ぼくのおかれていた気分から、いとも軽々と彼女の網に絡めとられてもしかたなかった。そうなんだ、ついには心をあらいざらい打ちあけ、秘密を明し、胸に秘めたあの像を見せる、というところまで籠絡されるにいたったのだ……」双方に強調されているのは現実の、生身の女性の上で美しさと魔性との混淆が実現していることである。[14]

グローガウでのホフマンとリヒテナウの交渉に関するエピソードをもう一点つけ加えると、夫人のサロンで、俳優ホルバイン Franz von Holbein は彼女と知り合い、不思議な引力で引き合うことになる。ホルバインが学業を続けるためライプチヒに行こうとすると、彼女は自分の死後は相当の額の年金を出すといって、個人的秘書となるよう

求めた。[15] 一八〇二年、王の許しを得て彼女は二十七歳下の俳優と結婚したが、一八〇六年以来別居（離婚ではない）した。俳優ホルバインはこのあとホフマンの最も親しい友人の一人となり、プロイセンの敗戦により裁判官の職を失ったホフマンのバンベルク時代には、同じ劇場で仕事をすることになる。

7 終わりに

『精霊奇譚』をめぐる謎のうち、全体のかなめに関わるオマリィ少佐と妖精アウローラに関するものは、あえて深入りすることなく、さほど重用でないL伯爵夫人の問題に拘泥してきた。オマリィとアウローラの問題は重要なだけ、むしろかえって理解される、と考えられることもその理由である。例えば、オマリィが悪の陣営に属するものの、相当魅力的に造形されている問題については、[16] これはホフマンの小説作法の一つと言えるので、彼には、いささかの同情もよばないグロテスクな悪の造形をする系列と、滑稽な、ユーモラスな形で描かれる作品の系列があり、後者の場合、悪はたいてい精霊界を通じて活動する。『王様の花嫁』Die Königsbraut（1821）や『精霊奇譚』などはこの系列に属するわけで、オマリィについていえば、その容姿や日常の奇行、さらには降霊の呪文に当時のハウツーもののベストセラーだった[17]ププリエのフランス語文典を用いたりすることなどに、ホフマンのユーモアへの意志が鮮明に現われている。精霊世界は、徹底した悪を形象化するのに馴染まないのかも知れない。『悪魔の恋』との比較でも、ここではユーモラスなトーンが物語全体を貫いていることにはさきに触れたが、主人公ヴィクトールの従者にタルケバルトというオイレンシュピーゲル型人物を配したこと、これがユーモアの基調を定め、作品の魅力の相当部分を担っているところで、そこにも性格づけが明瞭に見て取れるであろう。

最後にL伯爵夫人をめぐる様々な謎を振り返ってみる。オマリィ少佐の敵対者として主人公ヴィクトールを籠絡しようとした夫人は、いったい物語の上でどのような位置づけがされるのか。ヴィクトールを誘惑しようとして失敗したあと再度登場することのない、ストーリーの上でも本筋ではなく、なくても済むエピソードと言える彼女がどうして必要なのか。その登場がいささか唐突で、消え方もあっけないのはなぜか。もし夫人がヴィクトールの籠絡に成功したとき、どうするつもりだったのだろうか。青年を暗黒の魔手から救うのか、または彼女も別の悪の手先なのか。オマリィを敵視するのはなぜか。なにか魔術方面に通じ過ぎている印象もあって、位置づけがあいまいなのはなぜか。

読み流せば気づかれずにすむかも知れないこれらの謎が、物語にミステリアスな陰影を与えようとするホフマンの企図に含まれるのか、それとも構想上の手落ちなのか、という判定をわれわれに迫る疑問点となるだろうか。[18] あら捜しに類する読み方だ、と言われればその通りだし、問題のないところに問題を作り出していると批難されるかも知れない。その判定はさておき、あのリヒテナウ伯爵夫人が『精霊奇譚』でL伯爵夫人となって蘇ったと考えることで作品の謎が一つ解ける。どちらも状況を（一方は現実の宮廷政治、他方は物語の進行）いたずらに混乱させ、その後あっけなく影響力を失った、という共通点は残るのである。ヴィクトールの前に現われ消えたL夫人は、精霊世界とは無縁の、宮廷で影響力をふるうポンパドール的存在である。オマリィ少佐を描いたとき、それをビショッフヴェルダーに引きつけて造形したことから、いきおいリヒテナウ伯爵夫人にあたる人物を対置することになった。この奇譚の上では、特に必要ではないエピソードだし、いてもいなくてもどちらでもいい人物だった。二十歳の裁判官試補ホフマンの受けた鮮烈な印象が、はるか二十年後に『精霊奇譚』を構想するとき、作家ホフマンのペンを動かしたと想定

するのはあながち見当はずれとは言い切れまい。

注

（『精霊奇譚』は全体で四十ページ足らずで検索も容易と思われるから、テキストの引用ページをいちいち示すのは省略する）

（1）戦争場面の描写など、大衆の Unterhaltungsbedürfnis におもねている、という批判もある（Georg Ellinger の全集解説）。

（2）オマリィが倒れていた場面を、"意識下の性的なものとする研究者もいる。 James M. McGlathery: Mysticism and Sexuality E. T. A. Hoffmann. Part Two. Interpretations of the Tales. Bern 1985. S. 152–155.

（3）大衆小説作家ヴルピウスに『アウローラ』というタイトルの作品がある。これは結社小説。関係あるだろうか。Vulpius: Aurora. Ein romantisches Gemälde der Vorzeit. 1794, 1798, 1800.

（4）こういう入れ子型枠物語で外と内をメービウスの輪のように繋いで幻想を生みだすのはロマン派の短篇小説が切り開いたジャンルか。ティーク『金髪のエックベルト』など参照。

（5）また、ビショッフスヴェルダー Bischoffswerder とも。

（6）ヨーハン・アルブレヒト Johann Friedrich Ernst Albrecht（1752–1814）という医師でもあり、出版業も営んでいた人物が小説『効き目三態』„Dreyelrey Wirkungen" で事件の顚末を風刺的に扱い、その続編が『聖職追放者』〈Exkorporationen〉という雑誌に掲載された。エリンガー版ホフマン全集の注によると、雑誌の正確なタイトルは、Zeitschrift „Exkorporationen. Herausgegeben vom Verfasser der 'Dreyerley Wirkungen'" Dresden und Leipzig 1791. 1792. 2 Jahrgänge, 4 Bde. で、その小説の筋立ては……ある Herzog（Friedrich Wilhelm II. のこと）が寵臣 Beliwald（Bischoffswerder）のあやしげな幻影でたぶらかされる。亡霊を出現させると約束したり云々……だから、「オマリーに似た

人物が描かれている」とあるのは、外貌は異なっているが、この Beliwald のことと思われる。その他の点ではこの小説の内容はかなり「無害」であるという。

(7) Lujo Bassermann : Die ungekrönte Geliebte, 1967.

(8) その墓所の彫刻は時代を代表する彫刻家　シャード Johann Gottfried Schadow (1764—1850) の傑作の一つとしてベルリン、ドロテーア教会に残っている。

(9) 以上、リヒテナウ伯爵夫人の伝記は、ADB, Bd. 18 その他の事典類による。

(10) この結社については拙論「シャルロッテンブルクの降霊会」(大阪市立大学ドイツ文学会「セミナリウム」第十号) でもうすこし詳しく紹介した。また、種村季弘『薔薇十字の魔法』薔薇十字社 1972年 (新訂版　青土社 1986年) にもこの結社に触れた部分がある。

(11) Hans Erman : Berliner Geschichten, Geschichte Berlins, Tübingen 1980.

(12) ヴィルヘルミーネはビショッフヴェルダーを「雨蛙」Laubfrosch ヴェルナーを「烏賊」Tintenfisch と呼んだ (Ernst von Salomon : Die schöne Wilhelmine) とするのは、いかにもと思われる。

(13) 1798.4.1 ヒッペル宛の手紙 (Briefwechsel Bd. 1, S. 130f.) 参照。

(14) ホフマン自身が彼女に誘惑されかけた、と推測する者もいるらしい。Späte Werke, 1967 Darmstadt の注釈参照。

(15) Hoffmann in Aufzeichnungen, S. 57.

(16) モーツァルト『魔笛』の夜の女王のケースを思い出させる。彼女も悪の世界の住人のはずなのに、少なくとも前半ではとてもそのようには受け取れない。オマリィと『催眠術師』„Magnetiseur" のデンマーク人中佐との相似を言う研究者もいるが (Georg Ellinger の序文)、実際そこで登場する奇矯なデンマーク人 Oberst は名もなくさしたる活躍もしないのでここで埋め合わせたのか、と思われるくらいである。

(17) W. H. Bruford : Germany in the eighteenth century. The social background of the literary revival, 1935 ブリュフ

ボード『一八世紀のドイツ。ゲーテ時代の社会的背景』（三修社）二二六八頁。

(18) ホフマンは早書きで有名で、そのため構成の不備や矛盾がしばしば指摘される。彼はまた、ことばからの因果関係をわざと曖昧にすることも多い。

使用テキスト

E. T. A. Hoffmann: Späte Werke, 1967 Darmstadt.

E. T. A. Hoffmanns Briefwechsel. Gesammelt und erläutert von Hans von Müller und Friedrich Schnapp, Bd. 1 1967 Darmstadt.

主要参考文献

E. T. A. Hoffmann in Aufzeichnungen seiner Freunde und Bekannte. Eine Sammlung von Friedrich Schnapp, 1974 Darmstadt.

ジャック・カゾット、渡辺一夫＋平岡昇訳『悪魔の恋』(Jacques Cazotte: Le Diable Amoureux) 世界幻想文学体系第1巻、1976年、国書刊行会。

Allgemeine Deutsche Biographie. Berlin 1875／1912, (Neudruck 1967／71).

Biographisches Wörterbuch zur deutschen Geschichte. München 1973／75.

Internationales Freimaurer-Lexikon. Wien 1932, (Neudruck 1980).

Horst Möller: Die Bruderschaft der Gold- und Rosenkreuzer, in: H. Reinalter (Hg.): Freimaurer und Geheimbünde.

Walther Kiaulehn: Berlin. Schicksal einer Weltstadt. Berlin 1958.

Joachim Fernau: Sprechen wir über Preußen. 1981.

Ruth Glatzer (Hrsg.): Berliner Leben 1648–1806. Berlin 1956.

Klaus Hermsdorf: Literarisches Leben Berlin. Berlin 1987.

Lujo Bassermann: Die ungekrönte Geliebte. 1967.

Ernst von Salomon: Die schöne Wilhelmine. Ein Roman aus Preußens galanter Zeit. Stuttgart/Hamburg 1965.

Hase-Faulenorth: Die Gräfin Lichtenau, Berlin 1938?

Klaus Kanzog: E. T. A. Hoffmann und Karl Grosses Genius.
In: Mitteilungen der E. T. A. Hoffmann-Gesellschaft, H. 7 (1960), S. 16–23.

Hans Leitherer: E. T. A. Hoffmann und die Alchimie.
In: Mitteilungen der E. T. A. Hoffmann-Gesellschaft, H. 7 (1960), S. 24–26.

Herman Meyer: Der Sonderling in der deutschen Dichtung, München 1963.

Cerny, Johann: Jacques Cazotte und E. T. A. Hoffmann, [Zu ‹Der Elementargeist›.] In: Euphorion 15 (1908), S. 141–144.

Hans Toggenburger: Die späten Almanach-Erzählungen E. T. A. Hoffmanns. Bern 1983.